

## 結

本論文は、文学史の中で阮籍「詠懷詩」が占める位置を見極めようとするものである。

五章にわたって、受容に視点を据え、阮籍「詠懷詩」の有する個性を論じてきた。いま一度、文学の流れの中に改めて「詠懷詩」を置き、その特質について簡単に確認をしておきたい。

阮籍が生きた正始期に先立ち、建安（一九六～二一〇）という年号がある。この建安期において文学はひとつの転換点を迎える。建安以前の詩作は、「古詩」「樂府」と呼ばれる無名氏、詠み人知らずのものが多数を占めていた。いうまでもなく、こうした作者不詳の作品は、作者から切り離された状態で受容されてきた。

建安は、曹操、曹丕、曹植を初め、多くの名だたる人物が作品を残した時期である。このとき、作品に署名が付されるようになる。作品に詠う内容も多様化し、現実に生きる作者の経験を反映させたものとなっている。テキストそのものによって示される作者と作品の関係を極めて形式的に確認するならば、例えば作品中の登場人物あるいは地名からも窺われる。代表的な建安詩人の詩作のタイトルを列挙し、参照とする。

### ○曹丕

黎陽作詩三首、於譙作詩、孟津詩、芙蓉池作詩、於玄武陂作詩、至廣陵於馬上作詩、雜詩二首、於明津作詩、清河作詩、代劉勳妻王氏雜詩、黎陽作詩、寡婦詩〔阮籍の母に宛てたもの〕、令詩、夏日詩、見挽船士兄弟辭別詩、東閣詩

### ○曹植

獻詩、責躬、應詔、朔風詩、矯志詩、正會詩、閨情詩、公讌詩、侍太子坐詩、鬪雞詩、贈王粲詩、贈丁儀王粲詩、贈丁翼詩、贈白馬王彪詩、贈應氏詩二首、三良詩、代劉勳妻王詩雜詩、棄妻詩、遊仙詩、雜詩七首、雜詩、七哀詩、怨詩行、情詩、喜雨行、詩、七步詩、離友詩三首、妬詩、四言詩、離友詩、芙蓉池詩、言志詩、七哀詩、離別詩、述仙詩、寡婦詩

### ○王粲

贈蔡子篤詩、贈士孫文始、贈文叔良、贈楊德祖、為潘文則作思親詩、公讌詩、從軍詩五首、詠史詩、雜詩、七哀詩三首

○劉楨

公讌詩、贈五官中郎將詩四首、贈徐幹詩、贈從弟詩三首、雜詩闕、雜詩、射鳶詩、

○徐幹

贈五官中郎將詩、答劉楨詩、情詩、思室詩、於清河見挽船士新婚與妻別詩

○應瑒

報趙淑麗詩、公讌詩、侍五官中郎將建章臺集詩、別詩二首、鬪雞詩

例えば、曹丕の詩題に見える「芙蓉池作」「玄武陂」「広陵」からは曹丕の足取りを窺い知ることができる。曹植の詩題にみえる「丁儀」「王粲」「丁翼」「白馬王彪」は、彼の交流を物語るものとなっている。傍線を付した人名、地名は作品と作者の関係を保証するものとなっている。作品は、作者の経験あるいは作者が生きた現実世界と結びつけて読まれる枠組みがここに完成する。

阮籍が生きた正始（二四〇～二四九）はこうした流れの中において捉えることができる。「阮籍は晋の文の代に在り（顔延之）」「顔延年の注解、其の志を言うを怏る（鍾嶸）」「嗣宗は身を乱朝に仕え（李善）」というように、後世の注釈者、評論家たちが「詠懷詩」の背後にある現実を目を向けたのは、こうした受容の枠組みの中であって、至極当然なことであるかもしれない。

一方で、第四章「詠懷」と「言志」でも確認したように、「詠懷詩」における作品世界は建安詩とは異なる様相を呈する。「詠懷詩」全八十二篇に詠み込まれた人名及び地名は挙げよう。

○人名

二妃、交甫<sup>(2)</sup>王子晉<sup>(4)</sup>趙李<sup>(5)</sup>東陵<sup>(6)</sup>當路子<sup>(7)</sup>采薇士<sup>(9)</sup>閒游子、王子喬<sup>(10)</sup>繁華子<sup>(12)</sup>李公、蘇子<sup>(13)</sup>、顔閔、羨門子<sup>(15)</sup>、小人、君子<sup>(16)</sup>窮達士<sup>(18)</sup>佳人<sup>(19)</sup>楊朱、墨子、趙女、中山<sup>(20)</sup>夏后、夸父、王子<sup>(22)</sup>仙者<sup>(23)</sup>閒都子<sup>(27)</sup>路上童<sup>(28)</sup>應龍、妖女<sup>(29)</sup>友生<sup>(30)</sup>梁王<sup>(31)</sup>孔聖、松子、漁父<sup>(32)</sup>故時人<sup>(34)</sup>親友<sup>(36)</sup>雄傑士<sup>(38)</sup>壯士<sup>(39)</sup>安期、松子、尼父<sup>(40)</sup>列仙<sup>(41)</sup>園綺、伯陽、上世士<sup>(42)</sup>鄉曲士<sup>(43)</sup>孤行士<sup>(49)</sup>松喬<sup>(50)</sup>高子、三閭、混沌氏<sup>(51)</sup>夸毘子<sup>(53)</sup>子安、王

子<sup>(55)</sup>傾側士<sup>(56)</sup>非子、西王母、蓬戸士<sup>(58)</sup>丈人、繽紛子、一三者<sup>(59)</sup>儒者、老氏<sup>(60)</sup>斯人<sup>(62)</sup>妖姫<sup>(63)</sup>王子、浮丘公、時人<sup>(65)</sup>東陵、桑林子<sup>(66)</sup>洪生<sup>(67)</sup>奇士<sup>(73)</sup>上世士、寧子、楊歌、巢由<sup>(74)</sup>明哲士、便娟子<sup>(75)</sup>玄通士<sup>(77)</sup>神仙士<sup>(78)</sup>佳人<sup>(80)</sup>神仙者、羨門、松喬<sup>(81)</sup>少年子<sup>(82)</sup>

○地名

外野、北林<sup>(1)</sup>東園<sup>(3)</sup>西北<sup>(4)</sup>咸陽、三河、太行道<sup>(5)</sup>青門外<sup>(6)</sup>四海<sup>(8)</sup>上東門、首陽岑<sup>(9)</sup>北里、濮上<sup>(10)</sup>三楚<sup>(11)</sup>四野、青山阿<sup>(13)</sup>蓬池上、大樑<sup>(16)</sup>西方<sup>(19)</sup>射山、通靈臺<sup>(23)</sup>瀛洲<sup>(24)</sup>三江、扶桑<sup>(25)</sup>洪坡顛、西山<sup>(26)</sup>四海、瀛洲<sup>(28)</sup>大梁、黃華顛<sup>(29)</sup>魏都、吹壹<sup>(31)</sup>太華山<sup>(32)</sup>崑岳傍、列仙咀<sup>(35)</sup>八荒<sup>(39)</sup>九夷<sup>(40)</sup>南嶽、西戎<sup>(42)</sup>荒裔、丹山際<sup>(43)</sup>高山、朱堂<sup>(44)</sup>增城、幽谷<sup>(45)</sup>天池、蓬艾間、園圃籬<sup>(46)</sup>山岡、下林、前庭<sup>(47)</sup>庭樹、浮雲<sup>(48)</sup>三衢旁、澤中<sup>(49)</sup>暢谷、四海<sup>(52)</sup>鄧林<sup>(54)</sup>四野、堂隅、玉山下<sup>(57)</sup>荒裔<sup>(58)</sup>衢路旁、橫術隅<sup>(59)</sup>曲城、沙漠、九野坳<sup>(61)</sup>陂澤<sup>(63)</sup>上東門、首陽基、九曲間<sup>(64)</sup>伊洛濱<sup>(65)</sup>吾丘、汧渭間<sup>(66)</sup>乾味谿、天津、南林、清都<sup>(68)</sup>橫術、瀛洲野、明光、四海外<sup>(73)</sup>梁東<sup>(75)</sup>射山阿<sup>(78)</sup>林中、醴泉、山岡、九州、八荒、崑崙西<sup>(79)</sup>九陽間、隅谷<sup>(81)</sup>增城、九阿<sup>(82)</sup>

( )内の作品番号は『阮籍集校注』に基づく

「二妃」「交甫」は物語世界の人物、「李公」「蘇子」は歴史上の人物、あるいは仙人として知られる「王子晋」「羨門子」、実在する人間と結びつかない匿名性の高い「当路子」「采薇士」などである。地名もまた人名と同じように、全作品にわたって散りばめられているが、いずれもテクスト外の現実をそこに読み取るとは困難である。具体性の伴わない人名、地名によって彩られた作品は、建安の詩作とは異なる抽象度の高い表現世界を構築する。

しかしそうであるにも関わらず、建安詩と同じように、いやそれ以上に「詠懐詩」は現実を強く意識させる文学として浸透した。ここに阮籍文学の特質が見出されるように思う。

第一章から第五章の概要を示しておく。

第一章「阮籍」「詠懐詩」にみる時間の特質」では、「詠懐詩」の表現に現れた時間把握および生命把握について論じた。「一日復一夕」は、阮籍詩において初めてみる時間表現である。阮籍以前の作品に見える時間の流れを喚起する表現として、「冉冉」「忽忽」等が挙げられる。例えば「冉冉」「忽忽」から時間の流れのみを抽出し、そこに写し取られた時間の様相に注視していくと、過去から現在へ、そして未来に向かう一本の安定した流れが認められる。人々はそこに身を置き、過去をふり返り、未来

を見通した上で、現在を生きる存在として詠われる。

これに対し、「一日復一夕」は、現在に視線を据え、作中の主人公が今まさに臨んでいる一瞬一瞬を言葉として捉えた表現である。時間はいつ閉ざされるのかわからない不安定なものとして、それまでとは異なる認識の元詠出されている。過去から現在そして未来を無窮に流れるものとして予め見なせないものである。こうした独特な時間把握を写し取った「一日復一夕」は、後世に受け継がれていく。しかし、踏襲されたのは表現のみで、「詠懐詩」に現われていた特殊な認識は受け継がれることはなかった。ある意味において他者と共有されることのない時間意識、生命意識を下支えとする表現が独特な世界を構成し、阮籍詩に固有の色彩を与えたのだと分析した。

第二章「阮籍「詠懐詩」にみる空間の特質(一)」では、空間に焦点を当てた。「詠懐詩」全篇をとおして、二つの空間が描き分けられているように見受けられる。人間界(主人公が身を置く俗世)と仙界(俗世から隔たった空間)である。空間も先行する諸作品とは異なる様相を呈す。従来の作品における仙界はおおよそ不老不死を実現できる空間としてであった。人間界と仙界を隔てる境界線は明確に存在せず、主人公は両方の空間を行き来する。

これに対し、「詠懐詩」における仙界と人間界は、それぞれ正・負、善・悪のイメージによって形成される。仙界はちょうど人間界における負、悪が排除された完璧な空間となっていることを論じた。

続く第三章「阮籍「詠懐詩」にみる空間の特質(二)」では、主人公の逃避という行為をとおして浮かび上がる「場」に焦点を当て、主人公が生きる空間を更に詳しく考察した。「詠懐詩」は逃避を詠った作品が多い。そうした逃避の原点、起点に目を向けると、ある一つの「場」が浮かび上がる。主人公はその「場」にいま身を置き、そこから空間においてあるいは時間において異なる世界―神仙世界(あるいは神仙世界に準ずる隠士が住まう世界、方外、上世)への逃避を志向する。主人公が生きる「場」に目を向けると、それまでの作品とは異なる性格が認められる。「詠懐詩」に先行する「古詩十九首」及び建安詩では、生きる苦悩として時間の推移に焦点が当てられていた。

これに対し、阮籍詩に詠われた苦悩は、時間の推移だけでなく、時間の推移によって齎された不安定な「場」全体から生まれている。時間に感じる苦痛は、主人公が身を置く「場」の劣悪さとして収れんされる。それまでとは異なる空間把握である。自らが生きる「場」を苦悩に満ち溢れるものとして強く意識するところに作品としての特徴が見出される。

第四章「詠懐」と「言志」では、「詠懐」と呼ばれるところから浮かび上がる阮籍詩の受容のあり方を考察した。阮籍詩をめぐる言説の中に、「言志」という言葉がしばしば顔を覗かせる。しかし、阮籍詩は「言志」と結びつくことなく、「詠懐」と呼ばれるようになり、この呼称が定着する。先行研究では、「詠懐」の「懐」により重きを置き、その意義を論じようとした。本章では「詠」のほうにも目を向け、それによって喚起される行為としての表出の特質に目を向けた。他者に伝えることを目的としない、あるいは第一義としない阮籍詩の表出が、「詠」という文字によって上手く表現し得ていることを論じた。

第五章「六朝期における阮籍「詠懐詩」の受容」では、第四章とは異なる角度から阮籍詩の受容を考察した。江淹と庾信は阮籍詩を対象とした模擬作を残している。両者の模擬のあり方に特質が見出される。江淹「効阮公「阮籍」詩十五首」は、阮籍詩を再現すること、すなわち語彙、モチーフ、構成を意識的に模倣するのみにとどまらず、江淹自身の思い、感慨を表出する場となっていた。庾信もまた、思い通りに生きられなかった自らの人生、祖国の運命をふり返る作品群に「擬詠懐詩二十七首」と名付けている。ともに阮籍詩を模擬の対象として取り上げ、その模擬作はいわゆる模擬の規範の枠組みを越え完成される。そして、作者の胸懐を写している点において共通する。受容の過程において、阮籍「詠懐詩」は作者の内面を写し取る文学として展開していった様相が見てとられる。

最初の三章では阮籍詩の表現に即し、そこに現れた時間、空間の特質を追った。時間はいずれ一層緊迫感、緊張感に溢れ、空間（人間界）は負の要素によって満たされている。他の作品とは異なる独特な世界が展開されている。作中の主人公はこうした世界と向き合い生きる存在として詠われる。現実とリンクする明確な記号を何一つ詠み込んでいない作品であるのにも関わらず、過去の読者によって、「乱世」ゆえ生まれだた文学であると受け止められたのは、「詠懐詩」の表現に無意識に写し取られた、このようなある意味他者とは共有されない固有の世界観に求めることができよう。

阮籍が生きた正始という時代は、「名士 全する者 有ること少なし」といわれるように、「名士」がその犠牲となった中国の長い歴史においても特殊な「乱世」である。阮籍はその中で寿命を全うした数少ない一人である。しかし、それは最初から保証されたものではなく、生き抜いた結果でしかない。「詠懐詩」における時間及び空間の特質を作っているのは、常に死と対峙しながら生きる阮籍自身の実感に他ならない。第一章で見た「一日復一夕」という時間表現が阮籍から離れると、そこに現れていた緊張感、緊迫感が抜け落ちたのは、表現に投影された詠み手の体験が普遍的なもので

はなく、個別なものだったためである。作品の中に生きる主人公が、ただちに詠み手である阮籍として読み取られる所以である。

阮籍文学が示す個性は、受容の過程において新たな詩作のあり方として展開していく。阮籍自身の実感を反映させた作品群が、内面を吐露する作品として受け入れられ、後世の文学に大きな影響を与えていくこととなる。「詠懐」と名付けられたこと、また江淹、庾信の模倣作が示す模倣の特質によって示される。

正始という時代、阮籍にまつわるエピソード、そして「詠懐詩」というテキスト、作者をめぐる情報と作品が伝える情報がすべて緋い交ぜになったかたちで「詠懐詩」は受容された。作品世界はテキストの外にいるはずの阮籍によって彩られ、その胸中を写し取った作品によって阮籍という人間がなまましく立ち現れる。いうまでもなく、阮籍という人物の運命を抜きにして「詠懐詩」はここまで異彩を放つことはなかったであろう。「詠懐詩」というその苦悩を代弁している言葉としての作品を抜きにして阮籍はここまでリアルな存在として描き出されることはなかったはずである。

建安期において、署名が付され、作者自身の経験を反映した作品が多く現われた。個性に文学の価値を見出す萌芽をここ認めることができるのであれば、以降、唐・杜甫「語人として驚かさずんば死として休まず」と、佳句への極限までの追及に象徴されるように、その傾向はますます強まっていく。阮籍文学をめぐる個あるいは個性の顕現は、意識して求められたというより、その独特な世界認識を表現が無意識に写し取った結果というべきであろう。そうした表現世界は内面を吐露する文学として後世の人々に理解されたのである。阮籍文学の有する個性がやがて一つの詩作スタイルとして定着し、『文選』に「詠懐」という部立てが立てられたように、受容の過程において、阮籍「詠懐詩」は文学に新たな可能性を加えたのである。

注

― 前掲和田英信氏「建安文学をめぐる」を参照。